

バードリサーチ ニュース

2006年2月号 Vol.3 No.2



2006. 2.16.

Photo by Takagi Kentaro

参加型調査

季節前線ウォッチ アナウンス ～ウグイス・ヒバリの初鳴き～

植田睦之

まだまだ寒い日が続きますが、鳥たちにはもう春が感じられるようです。ラインセンサスとスポットセンサスの調査精度を比べるために、低山や丘陵で調査をしているのですが、もう、ヒガラやシジュウカラはさえずりをはじめています。

季節前線ウォッチの春の調査ではウグイスとヒバリの初鳴き情報を集めています。さっそく熊本からウグイスの、栃木などからヒバリの初鳴きが報告されています。これらの鳥の初鳴きを、お聞きになりましたら下記へお知らせください。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_chosakekka.html

ウグイスについては、九州では冬のあいだもケキョとかホケキョとか小声でグゼっているそうです。ですので、ホーホ

ケキョと完全に鳴くようになった時点を、この調査の初鳴きとします。また、ヒバリについては、冬のあいだでも暖かい日は地上で鳴いたりしますので飛びながらさえずりになった日を初鳴きとします。結果はホームページやニュースレターでお知らせいたします。

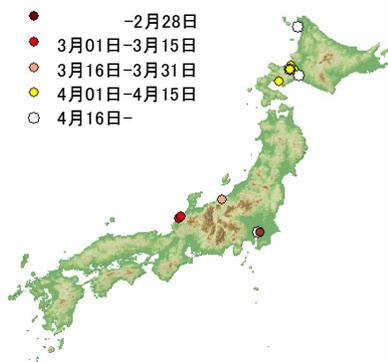


図1. 昨年のヒバリのさえずり前線の地図。調査開始が遅かったため、点は少ないが、太平洋側から日本海側を北上して北海道へと達する様子が見受けられる。

活動報告

関東カワウモニタリング2005年12月 調査結果報告

加藤ななえ

今回の調査では、のべ129人の方に参加いただき、82ヶ所のねぐらで、カワウの個体数と営巣数を調べ、また脚環の発見に努めていただきました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございます。

利用されていたねぐらは52ヶ所で、前回の7月の調査時よりも2ヶ所減少しました。新しく発見されたねぐらは、茨城県の4ヶ所です。茨城県では

大きなコロニーでカワウの追い払いが行われ、その近くに新しいねぐらが形成されたこと、そして、この追い払いの影響を調べようと調査の方々が精力的にねぐらを探しに行ったことが、この結果につながったのだと思います。

逆に今回は、多摩川や相模川にあった送電線などの人工物を利用したねぐらが複数箇所で見消滅しました。原因を

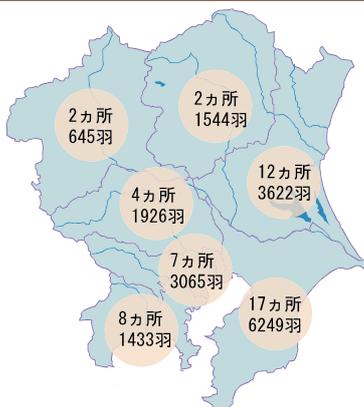


図1. 2005年12月の都県別カワウのねぐら箇所数と個体数。

断定することまではできていませんが、ねぐらに近い場所での河川工事などが影響したのかもしれない。

観察されたカワウの個体数は1都6県の合計で、18,484羽でした。この数は、2004年12月と比べると、1391羽の減少でした。しかし、今回の調査では、1ヶ所のねぐらで個体数のカウントができなかったため、この個体数は多少過小評価になっています。東京の村山貯水池で堤防工事のために水抜きが行なわれ、下湖のねぐらが上湖に移ったのですが、移動先の地形が悪く調査することができなかったのです。次の調査までに対応策を考えたいと思います。

都県ごとのねぐら箇所数と個体数を見ると、千葉県にカワウが多くいることが分かります(図1)。昨年からの12月でも千葉県のカワウの個体数が減らなくなってきています。行徳や小櫃川河口などの千葉県の沿岸部にあるねぐらの個体数は今までと同様に12月になると減っているのですが、房総半島の山の中や利根川に近い県北部の印西市に、冬に個体数が増える内陸型の大きなねぐらが形成され始めた(表1)ことが、この結果の原因だと考えられます。

表1. 2005年12月の調査で個体数の多かったねぐら ベスト5.

| 名前 | 個体数 | 都県 |
|------------|-------|-----|
| 1位 富津市新富 | 1,619 | 千葉県 |
| 2位 渡良瀬遊水地 | 1,527 | 栃木県 |
| 3位 行徳鳥獣保護区 | 1,518 | 千葉県 |
| 4位 印西市調整池 | 1,245 | 千葉県 |
| 5位 第六台場 | 1,125 | 東京都 |

海外最新情報

レーダーを用いた鳥類調査の活用 ～米国空軍のバードストライク対策～ 野村浩子

2005年10月号で、レーダーを用いた渡り鳥調査について紹介しました。そこで今回は、気象レーダーから得られる鳥のデータが米国空軍でのバードストライク対策に活用されている事例をご紹介します。

米国連邦航空局によると、民間機へのバードストライクは2004年だけで6360件、2004年までの15年間に負傷者134名、



図1. バードリサーチストライク?

死者8名を出しているそうです。空軍の軍用機でも同様に多発しており、1995年には、カナダガンの群れと衝突して搭乗していた24名全員が死亡するという悲惨な事故が起きました。機材や設備への損害も大きく、バードストライクによる被害総額は、民間機と軍用機をあわせると、なんと年間5億ドルを超えるそうです。こうした被害を減らすため、空軍では科学的根拠に基づいたバードストライク対策を進めています。そのひとつが「AHAS (Avian Hazard Advisory System, 鳥類の危機に関する警告システム)」です。

1. AHASとは

AHASは、米国本土内の飛行計画について、24時間以降、24時間以内、そしてリアルタイムのバードストライクの危険性を調べることができるオンラインシステムです。AHASのホームページで、飛行する場所(飛行ルート・射爆撃場・軍事行動エリア・軍用飛行場のいずれか)を指定して飛行日時を入力すると(図2)、危険度が低・中・高の3段階で表示されます(図3)。また、リアルタイムのデータについてはその後の傾向(増・V減・=現状維持)も表示されます。つまり、パイロットたちがこのシステムで調べた結果を考慮して飛行計画を立てれば、鳥との衝突を回避できるというわけです。

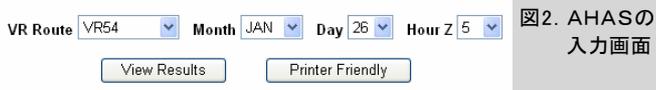


図2. AHASの入力画面

| Segment | Hour | Risk | Trend # |
|---------|------|------|---------|
| VR54A-B | 5 | LOW | = |
| VR54B-C | 5 | LOW | = |

図3. AHASの応答画面

2. 危険度を評価するしくみ

どれくらい先の危険度を知りたいのかによって評価の方法は異なります。24時間以降の危険度は、「BAM (Bird Avoidance Model 鳥回避モデル)」を使用します。BAMは、鳥の生息地、渡り、繁殖特性などのデータを、地形や植生などの環境情報とあわせて分析することができるGIS(地理情報システム)の技術を用いた予測モデルで、米国地質調査所の鳥類繁殖調査や、2004年12月号で紹介したオーデュボン協会のクリスマスバードカウントの結果などが、基礎データとして使われています。

24時間以内の危険度は、気象情報などをもとにした、渡り鳥の動きを予測するモデル (Migratory Bird Forecast Model) と上昇気流を利用する鳥の動きを予測するモデル (Soaring Bird Forecast Model) から得られた結果によって、総合的に評価されます。

リアルタイムの危険度の評価の際は、NEXRADという気象レーダーのデータが使用されます。NEXRADの観測結果はAHASに随時送信され、鳥のエコーだけが抽出されるしくみになっており、大規模な渡りをする鳥の動きを監視することができます。このデータをBAMのデータとあわせ、さらに上述の2つの予測モデルから得られた結果から、総合的に評価されます。また、2週間以内のNEXRADのデータをもとに、この後1時間の傾向も同時に評価されます。

AHASによってバードストライクが減ったのかどうか、詳しい情報は見つかりませんでした。しかし、システムはAHASのホームページで一般公開されていて、誰でも使うことができます。興味のある方は試してみたいはいかがでしょうか。

NEXRAD気象レーダーシステム

NEXRADは主にトルネードなどの危険な気象の動きを察知する目的で、気象局が158ヶ所に設置しているレーダーです。地上のアンテナから電波を放射し、雨や雪、虫、鳥などにぶつかって戻ってきた電波(エコー)の反射率、速度、周波数帯域を分析することによって、最大で約460kmの範囲の降水量と風速・風向を30分間隔で知ることができます。風の動きを「見る」能力を備えたことによって警報の早期発令が可能になり、人命救助に大きく貢献しています。

3. 日本での飛行機へのバードストライク

渡りの時期に飛行機に乗ると、到着地の空港の上で旋回したままなかなか着陸しない、という話を聞いたことがあります。実は日本の空港でも、年間数百件の頻度でバードストライクが発生しているらしいのです。

成田空港や新千歳空港といった国内の主要な空港では、「バードパトロール」という対策チームが結成され、空砲や鳥の嫌がる音を出す装置などで滑走路付近の鳥を追い払っているそうです。航空自衛隊の基地でもこれと同様の対策を取っており、飛行機に関わる仕事をしている人達にとって、鳥は身近にいる大きな脅威なのでしょう。

バードリサーチが実施するレーダーの調査が、バードストライク対策などに役立てられる日が来るかもしれませんね。

4. 参考文献

Federal Aviation Administration. 2005. Wildlife strikes to civil aircraft in the United States 1990-2004. PDF: <http://wildlife.pr.erau.edu/Bash90-04.pdf>
Hotwired Japan記事 <http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20050927301.html>

5. 参考ホームページ

Avian Hazard Advisory System <http://www.usahas.com>
Bird Strike Committee <http://www.birdstrike.org>
Radar Operations Center <http://www.roc.noaa.gov>
Weather Underground <http://www.wunderground.com/radar/help.asp>

レポート

オジロワシの渡り
～春と秋の渡り方の違い～

植田 睦之

白木さんが生態図鑑で書かれているように、北海道で繁殖するオジロワシもいますが、多くは冬になると日本に渡ってくる冬鳥です。私は日本野鳥の会在職時、環境省の委託調査でオジロワシの渡りを追跡する機会がありました。この成果は報告書や論文(Ueta *et al.* 1998)にまとめられていますが、ここでは、山階鳥類研究所の佐藤さんや東京大学の樋口さんと2002年度の鳥学会で発表したオジロワシの渡りの春と秋の違いについて紹介したいと思います。

追跡したのは1995年12月に北海道で捕獲したオジロワシ成鳥2羽です。2羽は越冬地を飛びたつと日本海岸を北上して、サハリンを通り、カムチャツカ半島で繁殖し、秋はそのままオホーツク海を時計回りで一周するようにして越冬地へと戻りました(Ueta *et al.* 1998, 図1)。

春と秋の渡りは、春は繁殖のために早く渡る必要があるなど特性が異なります。そこで、春と秋の渡り様式、利用環境がどう違うのか比較してみました。まず、経時的な移動距離を図にしました(図2)。曲線の傾きが春では大きく、秋では小さいことがわかったと思います。つまり、春の方がどんどん渡り、秋の方がゆっくり渡っているのです。最初に書いたように、おそらく春は繁殖のために早く渡り、秋はその必要がないので、無理せずに、ゆっくり渡っているのだと思います。では、どうやって無理のない渡りをしているのでしょうか？



図1. オジロワシの渡り経路。

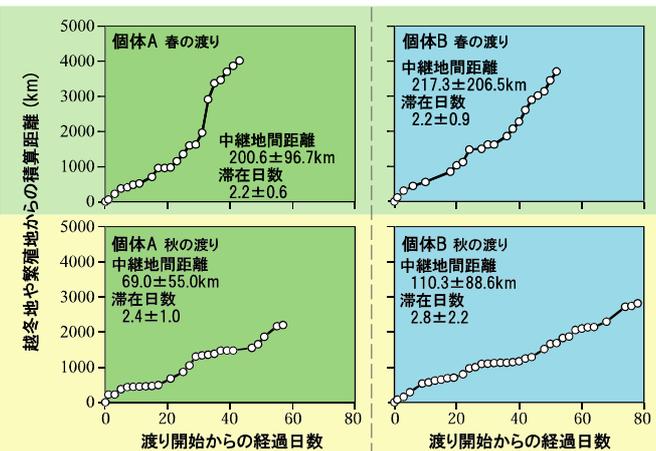


図2. オジロワシの春と秋の渡りの経時移動パターン。

単純化して考えると、少しずつ渡って体力の消耗を抑えるような方法と、中継地でじっくり体力を回復させながら渡る方法が考えられます。一度に渡る距離は、2羽とも有意に秋の渡りの方が短かったのですが、中継地での滞在日数には有意な違いはありませんでした。つまり、オジロワシは、一度に長距離を渡らないことで渡りの途中で死亡してしまう危険を軽減させているようなのです。



写真1. 氷上のオジロワシ [Photo by 福井和二]

これまでの研究では、近縁のオオワシをふくめた多くの渡り鳥は、一度に渡る距離を短くすることではなく、中継地に長く滞在することによって、渡りの危険を軽減させていることが示唆されています(Ueta & Higuchi 2002)。

オジロワシは他の鳥と違う。渡り方をしているようなのです。その理由の1つとして、秋の渡り経路の大きな部分を千島列島が占めていたことが考えられます。列島ですので、島間の距離は比較的狭く、一度に長距離を渡る必要はありません。反面、ワシにとって危険な海上を横切るので、一度に長距離を移動し、体力を消耗した状態で海を飛ぶより、小刻みに補給しながら渡った方が安全なのではないでしょうか。また、秋の渡りの時期、オジロワシは主に川を利用しています(図3)。北海道では秋期、オジロワシは産卵後に死んだサケ類の死体を主要な食物としています(植田ほか 1999)。秋の渡り経路上のカムチャツカや千島列島にはサケ類が溯上し産卵する河川が多く、中継地となりうる場所は多いです、かつ大量にあるサケの死体が、短期間で栄養補給を可能にしている、中継地で長期滞在する必要性が低いのでしょう。私たちはこのような理由から、オジロワシは他種と異なり、小刻みに渡ることによって渡りの危険を減らしているのだと考えています。

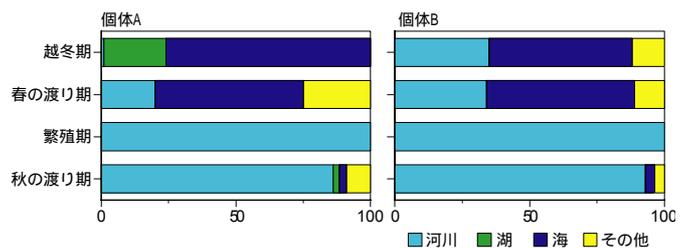


図3. 越冬期、春の渡り期間、繁殖期および秋の渡り期間にオジロワシが利用した環境の割合。

引用文献

植田睦之・小坂正俊・福井和二. 1999. 秋期のオオワシとオジロワシの分布に影響する要因. *Strix* 17: 25-29.
 Ueta, M. & Higuchi, H. 2002. Difference in migration pattern between adult and immature birds using satellites. *Auk* 119:832-835.
 Ueta, M., Sato, F., Lobkov, E.G. & Mita, N. 1998. Migration route of White-tailed Sea Eagles *Haliaeetus albicilla* in northeastern Asia. *Ibis* 140: 684-686.

オジロワシ 英: White-tailed Eagle 学: *Haliaeetus albicilla*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

| | | |
|--------|--------------|--------------|
| 全長: | 70-90cm | |
| 自然翼長: | ♂ 552-640mm | ♀ 621-715mm |
| 尾長: | ♂ 254-331 mm | ♀ 276-330 mm |
| 露出嘴峰長: | ♂ 47-58 mm | ♀ 52-64 mm |
| ふ蹠長: | ♂ 92-97 mm | ♀ 95-101 mm |
| 体重: | ♂ 3075-5430g | ♀ 4080-6920g |

※成鳥の計測値, Cramp & Simmons (1980) による.

羽色および虹彩色:

成鳥は頭部から胸部にかけて淡褐色, 老齢な個体ではクリーム褐色で, 体の後半分や翼は暗褐色. 尾は白色だが褐色の斑が残る個体もいる. 一方, 若鳥は全身が暗褐色で, 尾羽は黒褐色斑が一面に散らばる個体と, 白地に先端部のみ黒褐色の縁取りのある個体がいる. 虹彩は幼鳥は黒褐色で, 除々に淡い褐色となり, 成鳥では黄色.

鳴き声:

繁殖時期には上を向いてキヤツ, キヤツ, キヤツ, キヤツ...と力強く鳴く. 雌雄で合唱になることもあり, ディスプレイ飛行をしながら鳴くこともある. 警戒声はカッ, カッ, カッ, カッ.

種内・種間でいさかいが起きたときはキヤキヤキヤキヤキヤという鋭い声をあげる. ヒナは巢内や巢外でピーエーピーエーと良く通る声で鳴き, 親に餌をねだる. 若鳥が他の個体に攻撃されたときは, ピルルルルッと悲鳴のような声を出す.

2. 分布と生息環境

分布:

繁殖地はユーラシア大陸の北部と東部, グリーンランド南西部, アイスランド西部の他, アリューシャン列島でも営巣が確認された (Del Hoyo *et al.* 1994). 寒冷地で繁殖する個体群の一部は越冬期に南下し, 地中海沿岸やペルシャ湾沿岸, パキスタン, インド北部, 中国南東部, 日本などに渡る. 日本では, 北海道で少数のつがいが繁殖する他, 越冬期にはロシアからの渡り個体が全国に飛来する.

生息環境:

河川や湖沼などの淡水域から海岸や島嶼などの海水域まで, 多様な水域環境周辺で生息する. 生息環境には餌場となる水域のほか, 営巣場所やとまり場, ねぐらとして利用するための大木, 海岸部の崖や岩棚などを必要とする.

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
繁殖システム: 越冬 繁殖期 渡り

一夫一妻で周年をともに過ごす. 一度つがいになると関係は長年維持されると考えられている.

巢: 北海道では, 海岸や山地の斜面林や平坦地の湿地林などの大木に営巣する. 樹木の枝を組み合わせ造られ, 毎年補修されながら何年も利用される. そのため巣は巨大化し, 直径や高さが2mにもなることがある. ヨーロッパやロシア極東では, 巣が岩棚や地上に造られることも普通にある.

産卵から巣立ちまで:

産卵時期は生息地域によって異なり, 北海道では3月中旬～4月上旬だが高緯度の北極圏では一ヶ月ほど遅くなる (Del Hoyo *et al.* 1994). 1-3卵(多くは2卵, 稀に4卵)の白色無斑の卵を産む. 卵のサイズは長径67.5-84.2mm×短径53.4-64.0mm (清棲 1952) で, 抱卵はおよそ40日間である. 抱卵や育雛は主に雌が行うが, 雌が採餌に出かけるときなどは雄が交替する. 巢内育雛期は70～90日間にわたり, 巣立ちは6月下旬～7月中旬になる.



写真1. 巣立ち間近のヒナ.

巣立ち後:

根室での調査では, 巣立ち後2ヶ月間ほど, 幼鳥は巢の周辺に留まり親鳥から給餌を受け, 9-10月に親の繁殖地を離れてサケ科魚類の遡上する河川に移動した (Shiraki 2002). その後は餌の豊富な場所を求めて移動しながら過ごすようである. 成鳥になるまでには5,6年かかるとされる.

渡り:

極東ロシアの越夏地から北海道への渡来は10月からはじまる. 人工衛星による追跡調査により, 発信機を装着した2羽のオジロワシが越夏地であるカムチャッカ半島から千島列島沿いに南下して知床半島へと至ったことが確認された (Ueta *et al.* 1998). 一方, 秋の宗谷岬でもサハリンから渡ってくるオジロワシが観察されるので, 渡りルートは越夏地などにより異なると思われる. 渡去は宗谷岬からサハリン経由で越夏地へと向かうものが多いようだ.

4. 食性

魚類と水鳥類が主要な餌であるが, ウサギなどの中型哺乳類やヘビなども捕食する. 生きた動物を捕食する一方, 産卵後のサケ科魚類や海岸に打上げられたアザラシやクジラなどの死肉を食べるスカベンジャーでもある.

北海道のオジロワシの巣やその周辺から餌の残滓を回収し, 含まれていた餌鳥類について, 地域間・調査年代間で比較をした(図1). 1990年代に行った調査結果(図中の近年)から, 知床地域ではミズナギドリ類を主とする海鳥が(写真2), 根室地域ではカモ類が主要な餌であり, 地域によって異なっていた.



写真2. オジロワシの繁殖期にオホーツク海沿岸に分布するミズナギドリ類.

また, 知床半島と根室地域の1990年代の調査結果を, 1963-78年に行われた調査結果(図中の昔)と比較した. 昔は知床, 根室の両地域でカラス類が半数以上を占めたが, 近年では非常に少なかった. 知床地域の近年の主要な餌種となっていたミズナギドリ類は, 昔の残滓からは出ていなかった. 知床半島の海岸線で行われた調査では, 1979-81年には, 岩棚でカラス類が営巣していたが, 1998

年の調査では、確認されなかったことから、カラス類の巣の分布や数が変化した可能性も考えられる。

オジロワシは営巣地周辺に生息する餌種の分布や個体数の空間的・経年的な変化に対応して利用する餌種を変えたと考えられる。オジロワシの餌選択の柔軟性は、本種の餌資源利用の特徴のひとつであるといえる。

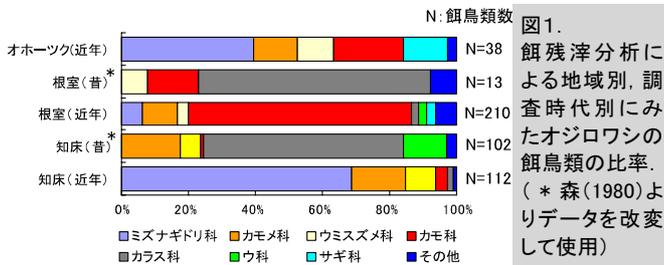


図1. 餌残滓分析による地域別、調査時代別にみたオジロワシの餌鳥類の比率。(* 森(1980)よりデータを改変して使用)

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

●北海道の繁殖個体群の状況

北海道の知床半島で繁殖するつがいを対象に調べたところ、近年16年間の繁殖成功率は平均76.4%、つがいあたりの巣立ちヒナ数は1.00であった(白木・中川 2005)。安定状態にあった1954年以前のスウェーデンのバルト海沿岸部の繁殖個体群では、これらの値はそれぞれ、72.0% (Helander 1994)と、1.30(Helander 2003)と報告されている。また、いったん衰退した個体群が近年急速に回復しているポーランドでは、1992～97年の調査で58.3%と0.83 (Mizera 2003)であった。これらの値と比較すると、知床半島の繁殖状況は比較的良好であると考えられる。

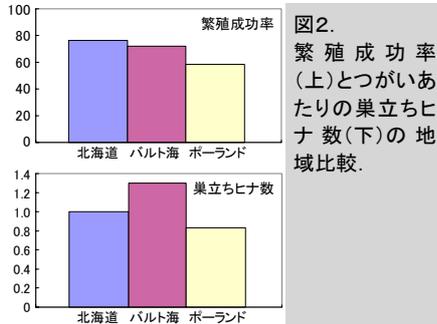


図2. 繁殖成功率(上)とつがいあたりの巣立ちヒナ数(下)の地域比較。

北海道では1991年に24つがいの営巣が推定されていたが、著者は1998年までに56つがい(白木 2000)、2005年までに90つがい程度の営巣を確認しており、北海道で繁殖するオジロワシは近年、増加傾向にあると考えている。

●日本で越冬するオジロワシの現状

水域の開氷部で魚類や水禽類を狙ったり、海岸に漂着した海産哺乳類の死体に集まるなど、自然の餌を利用している場合もあるが、近年、北海道で越冬するオジロワシやオオワシは、漁船や観光船などが投棄する魚に依存して、風蓮湖や野付湾、羅臼海岸などに集中する(写真3)。また、水産加工場やごみ捨て場、エゾシカの死体が餌資源となる山林などで越冬するものも多い。人間活動由来の餌は、ワシ類を人為環境に誘引して事故や病原菌の感染を引き起こしたり、供給が途絶える危険があるので、自然の餌への転換を促すべきである。たとえば、多数のサケが遡上して天然産卵する河川の保全・創出はその一例である。

一方、北海道で急増している風力発電施設は、オジロワシ

の営巣地や越冬地、渡りルートと重複する傾向が強い。衝突事故や生息環境の悪化による悪影響が懸念されているが、既に北海道ではオジロワシの風車への衝突による事故死が、2年間で4例明らかになっている。



写真3. 観光船の捲いた魚に集まるオジロワシ。

6. 引用・参考文献

Cramp, S. & K.E.L. Simmons. 1980. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. 2. Oxford Univ. Press, Oxford.

Del Hoyo, J., A. Ellotto & J. Sargatal (Eds). 1994. Handbook of the Birds of the World. vol. 2. Lynx Editions, Barcelona, Spain.

Helander, B. 1994. Pre-1954 breeding success and productivity of White-tailed Sea Eagles *Haliaeetus albicilla* in Sweden. Pp.731-733. In Meyburg, B.-U. & R. D. Chancellor (Eds.). Raptor Conservation Today. WWGBP/The Pica Press.

Helander, B. 2003. The White-tailed Sea Eagles in Sweden—Reproduction, numbers and trends. Pp.57-66. In Helander, B., M. Marquiss & B. Bowerman (Eds.) SEA EAGLE 2000. Proceedings from an international conference at Björkö, Sweden, 13-17 September 2000.

清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑 第II巻. 講談社, 東京.

Mizera, T. 2003. White-tailed Sea Eagles in Poland. Pp. 79-83. In Helander, B., M. Marquiss & B. Bowerman. (Eds.). SEA EAGLE 2000. Proceedings from an international conference at Björkö, Sweden, 13-17 September 2000. Swedish society for nature Conservation/SNF & Ätta.45 Tryckeri AB, Stockhoklm.

森 信也. 1980. オジロワシの繁殖生態. 鳥 29: 47-68.

白木彩子. 2000. オジロワシ. 斜里町立知床博物館[編]. 知床の鳥類. 北海道新聞社, 札幌. Pp. 126-177.

Shiraki, S. 2002. Post-fledging movements and foraging habitats of immature White-tailed Sea Eagles in the Nemuro Region, Hokkaido, Japan. Journal of Raptor Research 36: 220-224.

白木彩子・中川 元. 2005. 知床半島におけるオジロワシの繁殖状況. Strix 23: 115-123.

Ueta, M., F. Sato, E.G. Lobkov & N. Mita. 1998. Migration route of White-tailed Sea Eagles *Haliaeetus albicilla* in northeastern Asia. Ibis 140: 684-686.

執筆者

白木彩子

北海道大学 大学院地球環境科学研究所
オゾン層破壊評価分野



オジロワシの繁殖個体とロシアからの越冬個体の両方が混在する北海道では、極東の生息域全体を視野に入れた研究と保全への取り組みが必要。とくに北海道と他地域(たとえば南千島列島やサハリン等の繁殖地)の繁殖個体群の関係を明らかにし、保全の単位を明確にしたい。

参加型調査紹介

オオトラツグミー斉調査のご紹介

オオトラツグミは、奄美大島にのみ生息し、個体数が非常に少なく、絶滅危惧 I A類に指定されている鳥です。生息地選択がとて限られていて、鬱閉した照葉樹林を好むため、島内でも一部の地域にのみ生息しています。そのため、生息地である鬱閉した照葉樹林の縮小分断化が保全上大きな問題です。詳しい生態については、まだわかっていないことが多いのですが、1994年から繁殖個体数を把握するための調査が、NPO法人奄美野鳥の会によって毎年行なわれ、2005年3～4月の調査によると、合計141羽のさえずり個体が確認されています。



写真1. オオトラツグミ。
[住用村 提供]

この調査は、オオトラツグミがさえずる夜明け前の薄暗い時間帯に、林道に設定したルート上に1kmおきに1組の調査員を配置し、それぞれが2kmの範囲を徒歩で1往復して、さえずりが聞こえた場所を地図に記録していくという方法で行なわれます。そのため、短時間に大勢のボランティアの参加を必要としています。参加者の数は毎年増加していて、僕は一度も参加したことがないのですが、100人もの人が集まるそうです。さて、どんな雰囲気なのでしょう？

調査方法やさえずりは説明会で教えてもらえるということ

です。多少とも野鳥観察の経験のある大人の方（子どもの場合は、保護者同伴）であれば、どなたでも参加できるようなので、興味のある方は、奄美野鳥の会にメールか電話で問い合わせて、参加してみたいかでしょうか？【高木憲太郎】



写真2.
調査は山道を歩いて行なう。
[Photo by 石田健]

● 一斉調査参加者募集要領からの抜粋

- 調査名： オオトラツグミー斉調査
 調査地： 鹿児島県奄美大島
 調査日： 2006年3月19日…本調査(一斉調査)
 3月18日、20日、21日…補足調査
 説明会： 事前に調査参加者向けの説明会を行いますので、いずれか一日への参加が必要です。
 3月14日、15日、16日(奄美博物館)
 募集対象： 多少の野鳥観察の経験のある方 100名
 参加費用： 調査にかかわる費用以外の旅費等は、すべて参加者の自己負担
 調査主催： NPO法人奄美野鳥の会
 TEL&FAX：0997(57)7593
 E-Mail：lidthi@po.synapse.ne.jp

募集要領の詳細は下記Webサイトをご覧ください。

<http://www.synapse.ne.jp/~lidthi/AOC/news/ootorabosyuu06.htm>

活動報告

3月5日に事務所を移転します！

皆さま、来月早々に事務所を移転することにしました。移転先は、なんと、「森美荘 II-202」!! 着実にステップアップしている感があって、良い響きだと思いませんか？

2006年1月号に紹介した鳥インフルエンザ関連の渡り鳥の調査のほかにも、来年度はいくつか新しい事業が増える可能性がでてきましたので、事務所を少し広い場所に移そうかと考えはじめていたところ、忘れもしない2月2日、窓際の席の植田さんが、「おや？」と窓の外を見上げていました。見上げていた先は、森美荘IIの2階、今の事務所がある森美荘Iの南側に並んで建っています。どうやら、不動産屋さんが、お客さんを連れて部屋を見に来ていたのを発見したようなのです。

さあ、大変です。加藤さんが、急いで不動産屋に電話を入れます。「今すぐ、見させてもらえませんか？」返事はOK、不動産屋さんがカギを持ってきてくれることになりました。待っている間は、なんだか心が落ちつかなくて、仕事の手につきません。3人そろって興奮していました。

部屋を見せてもらった後は、即決です。2階なので、机などの運び込みは大変ですが、6畳2部屋にDK、今よりだいぶ広くなり、部屋も綺麗です。

事務所に遊びに来られる時は、間違えないように気をつけてください。



移転先の部屋。右奥の洋室には出窓がある。

バードリサーチニュース 2006年2月号 Vol.3 No.2

2006年 2月 16日発行

発行元： 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者： 植田睦之

編集者： 高木憲太郎